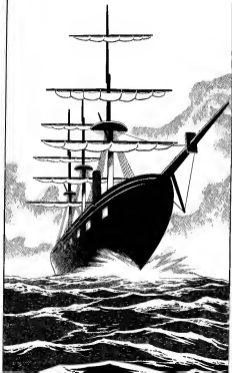
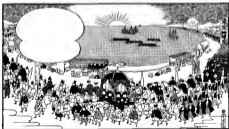
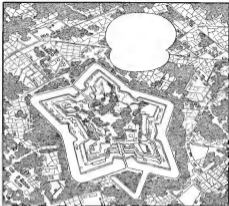
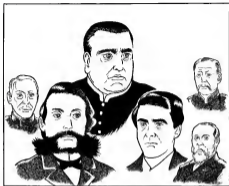


第64章

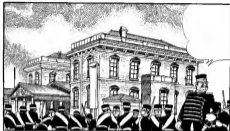






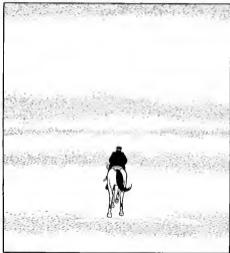












資料協力

深澤泰旦、東洋文庫

王子製紙、アン・ヘリング

千葉県東金市役所市史編纂室

陽だまりの樹

昭和56年4月25日号～昭和61年12月25日号

ビッグコミック 連載

あとがきにかえて

手塚治虫

私の三代前の先祖は手塚良仙といい、大阪の通塾にあつて三五九番目の門人として、緒方洪庵に学んだ医者である。

三代前の先祖が、南中藩松平藩守の侍医だった、ということとは、以前からうすうす知つてはいた。ある日突然、日本医史学会の深瀬泰且という方から、私の論文だが読んでほしい、貴男のご先祖のことを書いた、というわけで、「歩兵屯所医師取締、手塚良斎と手塚良仙」なる小冊子が送られてきた。

それによると、安政二年、良仙は江戸小石川三百板の家を出て大阪へ向かい、十一月二十五日、通塾の門を叩いたのだった。

その八か月前、通塾には、堀澤諭吉が三二八番目の門人として入門しているから、手塚良仙と諭吉とは、いわば「同期の桜」ということになる。

もしや、と思つて私は「堀翁自伝」をひもといてみた。すると、果たして通塾時代の記述の中に、あつた。手塚良仙のエピソードがあつた。

手塚良仙は、通塾当時、良庵と名乗つていた。良庵は学問も熱心だったが、なによりも無類の道楽者だつたようであつた。女遊びにかけては、かなりだらしない男だつたらしく、毎夜のような靡邁には諭吉も呆れ果てて、良仙に忠告をして、真面目に通塾をするようにしむけた。しかし女を断つた良仙は、諭吉にとっては、どうもおもしろくない。そこで諭吉や同僚はわざと女文字の手紙

をでっちあげて、さりげなく真伯に読ませ、真伯がけげんに思つて廊へ出向こうとするのをとつかまえて、寄つてたかつて坊主にしようとした、真伯は平謝りに謝つて一同に預者を振る舞うことで、やっと許してもらつた、というエピソードなのである。

真伯の女好き、という点では、恐縮だが私の父にそっくりだし、おちちよこちよいでだまされやすい、ということでは私の性格そのままである。読むほどに、やっぱり手塚家の血は、争えないものだと思ひ込んだ。

それにつけても、通塾の塾風は、いたつてユニークなもので、ふだんはいたつて自由平等、豪放磊落で、痛飲しては大坂の町中で好き勝手に暴れ廻つていて、苦学生ぞろいの寄宿生活でありながら、羨ましいほど明朗で活発な雰囲気であつたらしい。一方勉学のほうはといえば、乱雑な寄宿室に数十人が集つて、塾頭を中心に会談というものをやる。これは次々に原書を読み進めて行きながら、次第の者へ質問を浴びせる、一問ごとに答えられれば白丸、わからなければ黒丸をつけて、一か月でその数をしらべて席順をきめる、というきびしい講義だつたようである。またグループ・ハルマというオランダ語とフランス語の対訳の辞書が置いてある部屋があり、会談の前日には、その辞書を夢中になつて徹夜で調べる者が一晩中群をなしていたそうである。

だいたい緒方洪庵の高名をしたつて集つてきた門人達は、別に医者を志す人間とは限らなかつた。語学までして、将来何になるのかなどは、ほとんど考えず、ただ漠然と論議し相手を負かしたり、むずかしい原書を読むことで優越感を満足させるという、そういうた目的なしの苦学を続けたのだつた。

當時の状況は、医学界では、いまだ漢方医が幅を利かせていたし、長い鎖国政策が一種の知的飢

障の状況を生んで、長崎へ行ってオランダ人から西欧の学問を学ぶことが、進歩派のジレンマの突破口であった。

そういったルートから、西欧の思想や科学技術の新しい波は、すこしずつ、しかし確実に日本に浸透していった。緒方洪庵の代表的な二つの事業である「種痘の普及」と「コレラ対策」は、その新しい波が日本の医学の限界をつき破って、近代化への門戸を開いた重大な業績といわねばならない。

天然痘は百年前の日本では、防ぐ方法すらない災厄であった。多くの人々が死に、生き残ったものにはあばたのあとが残って、「あばた面の日本人」として外国で有名になるほどだった。ジェンナーの種痘が、牛痘として日本に渡来したとき、洪庵はそのたねを手に入れて大坂に除痘館をつくって一般庶民に種痘をほどこして行なった。しかしその苦勞は並みだいていのものではなかったらしい。

なにしろ、常識的には当時想像を絶する試みなのである。人々の間に、牛痘をほどこされると人間が牛になるという噂がまことしやかに伝えられた。洪庵は人々を納得させるために、「牛痘神」という神像をつくりあげて、それが「痘瘡の悪鬼」を追ひ払うというお札までつくった。また、種痘をする者には、大人には米を与え、子供には菓子配り、時には金銭を払ってまでも種痘をすることを承諾させたという。それでもなお町を歩く洪庵をののしったり、ものまでぶつける人々があつたといわれている。

しかし洪庵の努力の甲斐があつて、痘瘡法は、次第に一般に普及していった。手塚良雄も、他の門人達と共に、師をたすけて、除痘館や医学所で種痘にはげんだことが記録に残っている。

もう一つはコレラである。コレラは江戸時代に何度か大流行して多くの人々が死んでいるが、安政五年の大流行のときはアメリカ船ミシシッピ号が患者を運んで来たのだった。コレラはこもりと驚れることから虎狼瘧と呼ばれ、長崎から九州、中国を経て近畿一円にあっていうまにひろがり、なんら対策もないまま、どんどん東上してついには江戸へ達した。

当時はこの病気の正体はまったく不明であった。毒物説、それも水に毒が混ざれたとか、魚に毒があるとかいわれ、また天狗のたたりにされて、天狗退散のために羽うちおとか、羽うちおに似た人つ手の葉を軒にぶら下げたり、また、毎日のように墨瓦払いの行列がくり出されたりした。いかさま予防薬やまじない札が飛ぶように売れ、人々はばたばたと死にながら、打つ手もなく、コレラが終息するのをただ待つだけであった。

こんな中であつて緒方洪庵は「虎狼瘧治準」を上梓して、冷静に症状や治療法を記述して、他の医師に指針を与えている。当時、長崎にオランダの医師ボンベが逗留していて、ウンデルリッヒの「コレラ治療法」をもとに、キニーネを使った治療をやっていたが、洪庵はこれに対して三つの書物の記述を統合して治療法を記した。ボンベのコレラ治療とは対立した形となったが、洪庵はのちにボンベの説への自分の誤解を遺憾として、「虎狼瘧治準」につけくわえている。

コレラや牛痘種痘の事件を例に挙げるだけでも、この時代は日本における近代医学の誕生への陣痛にも匹敵する年月だったのである。江戸の蘭医、伊東玄朴や大槻俊斎たちの根強い勢力が功を奏して、やがて蘭方禁止令がとかれ、それまで蘭方医の専任だった將軍の侍医である奥医師に蘭方医が加わることになる。これは名実ともに西洋医学の勝利である。しかし、そこへたどりつく道程に、緒方洪庵はじめ蘭方医たちの血のにじむような努力と苦しみがつづいたのだった。

それにしても決庵の率いる通塾の存在は實に革新的雰囲気にあちたものだといえる。それはひたすら決庵自身の気風と人徳によるわけだが、さらにその塾生達にみえる新しい知識への旺盛かつ貪欲なトライイの精神があつてこそだった。大村益次郎（村田藏六）、橋本左内、大島圭介、長年専攻、福澤諭吉、その他幕末から明治への激動期に名を馳せた人々、またそれに十倍する無名の人々が、遠點から全国に拡がり、それぞれの分に応じて近代医学発展に役割を果たしたのである。

（その中に手塚良伯も居る。良伯は後に幕府陸軍の歩兵屯所付き医師―日本で最初の軍医―の一人として、西南戦争に従軍したのである。）

個人的な体験談にて恐縮だが、私は、通塾における雖然たる中に爆発的なエネルギーと挑戦力を持った集団のイメージを、かつて私が主宰した虫プロダクションの内部に見た。虫プロのスタジオにみえる活気と、うらはらに誰かが貧しく、秩序も統制もないばらばらの個性の衝突、混乱の中に試行錯誤をつづけたあの時代。――今思ふと、あれこそ、アニメという新しい映像文化の黎明期の象徴だった。そして、その中から、現在のアニメーションの中心的役割をになう人々が実に数多く、果立っていったのだった。

今日、先端技術は近代医学のパラダイムを根本的に変えようとしている。さらに老齡化社会や、脳死の問題など、生命と倫理に関して見過ごすわけにいかぬ問題がますます山積みしている。

かつてコレラや種痘に無知であつた時代、大騒ぎしながら通過した試験に、別種の形でありながら私達は再び通過せねばならぬ。今こそ第二の通塾が必要なのかも知れない。

読者の皆さまへ

『手塚治虫漫画全集』の作品の中には、アフリカの黒人や、東南アジアの人々をはじめ多くの外国人の姿が出てきます。それらの絵の一部は、いかにも未開発国当時の姿だったり、過去の時代を誇張して、現在の状況とは大きを違ひがあります。最近、このような描き方は黒人や一部の外国人に対する人種差別であるという指摘がなされております。こうした絵に不快感を覚え、侮辱されていると感じる人がいる以上、私たちはその声に真摯に耳を傾けなければならぬと思います。

しかしながら、人々の輪郭を誇張してパロディ化するということは、漫画のユーモアの最も重要な手法のひとつです。手塚作品では特にそれが顕著で、多くの国の人がパロディ化の対象になっていきます。また作者は人間に限りず、動植物の世界から想像の世界のものたちまでもユーモアたっぷりによりやたらタタキ化しています。それは作者の自由体でよく例外ではなく、彼の鼻は実態よりも数倍大きく描かれています。また作者はつねに文明と未文明、先進国と発展途上国、強力者と弱者、金持ちと貧乏、健康者と障害者など、すべての概念と対立は愚であるという信念を持ちつづけた人で、物語の底には強い「人間愛」が流れています。

私たちが今あえてこの『手塚治虫漫画全集』を刊行しつづけるのは、作者がすでに故人で作品の改訂が不可能であることと、第三者が故人の作品に手を加えることは、著作者人格権上の問題もあることとながら、当該問題を考えてゆくうえでも決して適切な処置とは思えないこと、加えて私たちには日本の文化遺産と評価される作品を守ってゆく義務があると考えるからです。もとより私たちは地球上のあらゆる差別に反対し、差別が無くなるよう努めてまいります。それが出版に携わる者の責任であると考えます。読者の皆さまも、この手塚作品に接するのを契機に、さまざまな差別が存在している事実を認識し、この問題への理解を深めてくださいますようお願いいたします。

あなたは、この『手塚治虫漫画全集』を読んで、どんな感想をお持ちになりましたか。

編集部では、この手塚先生の全集について、読者の方たちのご意見をお待ちしています。

ご意見、読後の感想を左記のところあてに、どしどしお知らせください。

東京都文京区音羽一―二二―二二
（郵便番号一―二二―八〇〇〇）
読者社 月刊少年マガジン編集部

手塚治虫漫画全集 18

陽だまりの樹⑪

一九九四年 九月 十六日 第一刷発行
一九九九年 七月 九日 第二刷発行

全書は二冊にわたって出版されています。

著者 手塚 治 虫

発行所 五十嵐隆夫

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽一―二二―二二

（郵便番号 一―二二―八〇〇〇）

電話 編集部（三三）五五―二九五―二四五九

販売部（三三）五五―二九五―二六〇八

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

注丁本・乱丁本は、小社編集業務所宛にお送りください。送料小社負担にてお返替します。

電話（三三）五五―二六〇―二二

なお、この本についてのお問い合わせは、毎月少年マガジン編集部にお願いたします。

お問い合わせ先マガジン 一九九四年



本書の無断複製・転載は著作権法上の刑罰を被る、厳禁されています。

《著者紹介》本名、給。1928年11月3日、大阪府豊中市生まれ。大阪大学医学専門部卒業。医学博士。1946年『マァチヤンの日記帳』でデビュー。1947年『新宝島』が大ヒットする。以来、日本のストーリー漫画の確立に尽くす。また、アニメーションの世界でも、大きな業績を残す。代表作に『鉄腕アトム』をはじめ『リボンの騎士』『火の鳥』『ジャングル大帝』『ブラック・ジャック』『ブッダ』『アドルフに告ぐ』等がある。



講談社
定価：本体602円
(税別)



伊武谷万二郎は、征長軍隊長を突然解任された。崩れかかった幕府を何とか再建しようと目論む万二郎は、無能な閣老達の暗殺を企てる!! 激動する時代に翻弄された万二郎と、それを見つめる手塚良輔の運命を描く完結編!!

装幀／鶴本三三・田形善一